

日本医療安全学会事務局

〒431-3192 静岡県浜松市東区半田山 1 丁目 20-1 浜松医科大学総合人間科学基礎研究棟 306 号室

<http://www.jpscs.org/> Email: [office@jpscs.org](mailto:office@jpscs.org) TEL:053-433-3812 FAX:053-435-2236

### 「世界患者安全の日」によせて

### 「医療安全をかなえるために」…私たちの思いを紹介します

日本医療安全学会には、医療安全を実現しようと医学や法学などさまざまな立場の人たちが集まり、9月17日の「世界患者安全の日」には、講演を行うなど啓発活動も積極的に行っています。そもそもなぜ、私たちは医療安全に取り組んでいるのか、どうすれば安全な医療を実現できるのか。同学会広報委員を務める永尾るみ子委員と新田雅彦委員に、医療安全への思いや、医療安全を実現するためのアイデアを聞きました。

(聞き手・道丸摩耶=同学会広報委員)



——まずはおふたりが医療安全に取り組むことにした理由をお聞かせください

永尾委員「私は現在、看護師として働いていますが、わが子を出産直後に病院で亡くした経験が活動の原点です。同じように赤ちゃんを亡くした親の精神的なサポートをする活動の中では、医療者を責める声も多く聞きました。一方で、つらい思いをしている親や患者に寄り添おうとする医療者の存在も知り、患者と医療者の橋渡しをするメディエーター（※1）という役割になりたいと40代で看護学校に入ったんです」

新田委員「私も自身の経験がきっかけです。小児科医として小児救急の道を究めようとしていた矢先の1999年、医療事故（※2）に遭遇しました。手順に則って医療をおこないましたが、遺族と訴訟になったことから、これまで担当医として向き合ってきたご家族と対話ができなくなってしまいました。話したのは民事訴訟の法廷でのやり取りだけ。それがずっと心残りでした。多くの悲しい事故から、今では多くの病院が医療安全の部署を置くようになり、私も医療安全推進室の室長として、専門的に向き合うようになりました。それでも何年たっても、99年の、あの亡くなられた患者さんを忘れることはありません」

永尾委員「事故から10年、20年経ってもなお、『自分が直接、謝りたかった』と後悔の思いを持つ医療者は少なくありません。自分が医療者になって感じたのは、医療事故を起こそうとする医療者はいないし、事故を起こした医療者もまた傷ついているということです。患者側の願いは、医療者側に正直に向き合ってもらいたいこと。両者が対立するのではなく、対話し、共に学んでいく姿勢が必要だと思います」

——病院で医療安全の取り組みを進めるに当たって、課題に感じることはありますか



＜にった・まさひこ＞  
大阪医科薬科大学病院  
医療安全推進室 室長

新田委員「医療事故なのか、医療過誤なのか、原因を調べる部署と、患者さんとのトラブルを解決する部署が違うことで、動きづらいと感じることが時にあります。院内にはメディエーターもいるのですが、慢性疾患などの患者さんに寄り添うのが仕事で、紛争になったときにメディエーターが入るのは難しい現状にあります」

永尾委員「医療現場に入って感じたのは、働きやすい現場づくりが医療事故を減らすということです。わからないことや不安なことを言葉にだしても大丈夫な環境づくりや助けて欲しいと言える関係性はとても大切です。多重業務に追われて疲弊しきった職場では、誰もがいつ当事者になるか分からないということです。そして、万が一事故を起こした際に調査に関わる立場の人とケアをする存在が同じ人物でないことがとても重要です。なんでも言ってね、と言われても日常の関係性が悪いとそれは機能しません。事故後、医療現場を去る看護師を多く見てきました」

新田委員「医療は年々複雑で高度になり、その分、患者さんやご家族に説明する時間も長く必要になっています。それなのに医師も看護師も忙しく、逆に患者と話す時間が減ってしまっています。医師の働き方改革が始まったら、ますます患者と向き合う時間が減り、医療安全の面からも医療は崩壊するのではないかと危惧しています」

永尾委員「コロナ禍で変わったことのひとつが、オンライン学習が組み込まれる場面が増えたことです。仕事が終わった後、自宅や移動中に必死に動画を見ているという話も聞きます。常に知識や技術の向上が求められる中、時間外の学びの強制やそもそも日常の業務でも看護師でありながら患者に関わることの全てという言葉のひとくくりとされ雑用が多過ぎることも事実です。日本は、病院数もベッド数も世界1位ですが人口比で医師数は先進国の下から6番目、看護師もベッド当たりでは下位に位置します。きちんと体を休め、誇りややりがいをもって看護の仕事に専念できなければ、医療安全も脅かされます」

――今後、医療安全を根付かせていくにはどうしたらいいでしょうか

永尾委員「コロナ禍での受診控えは良くも悪くも考えさせられる出来事だったかと思います。コンビニ受診が話題になった時代もありましたが、軽い不調でも子供を受診させることや救急車を利用することが問題になりました。カリキュラム的に無理なこともかもしれませんが、中学や高校など学校教育の中で基礎看護を学び、知識が身に着いていれば、自分で対処できることも増えるはずです。そうやって医療者の負担を、一般の人が家庭医学として担えるような教育システムであったり、私のように、大切な人を喪って、初めて医療に目を向けるというのではなくテレビドラマの出来事に終わらず、関心を持っていけるような情報発信が出来ればと思います。私たちも市民公開講座などでそうした話をしますが、まず、関心がない人には来てもらえません。患者と医療者が同じ視点、同じ眼鏡を持ち、語りに耳を傾け、共同で協働し、協同していかなければ、医療安全は成り立たないのです」

新田委員「確かに、医療者と患者が仲間になっていく必要を感じます。長く医療の現場にいる医療者とそうでない患者では、同じものを見ても同じように見られないことを認識した上で、互いの見方を理解するために歩み寄っていくことが基本だと思います。そこに第三者に仲間になってもらい、コアをより強く、大きくしていく。患者さんに協働してもらうためには、医療者も医療の中身をきちんと開示していく必要があるし、患者さんにも安全に医療を受けるための医療安全に関する手引きのようなものがあつたらいいですね」

永尾委員「遺族会や患者家族会といった仲間も存在すれば、医療者同士の仲間、医療者と患者家族から成る仲間、医療の現場では幾重もの形で仲間が存在します。患者家族を救うことは医療者を救うこと。医療者を救うことは患者家族を救うこと。さまざまな仲間づくりが医療安全には欠かせません」

新田委員「コロナ禍で人と人とが関わりを持つことが難しくなりましたが、これからは直接の対話も増やしていける。そうして、皆で医療安全を実現していけたらと思います」



＜ながお・るみこ＞  
一般社団法人 Heals 理事長  
医療メディエーター

＜にった・まさひこ＞大阪医科薬科大学病院医療安全推進室 室長

＜ながお・るみこ＞一般社団法人 Heals 理事長、医療メディエーター

- ※1 メディエーター 医療機関で患者側と医療者側の対話が進むよう橋渡しをするスタッフのこと
- ※2 医療事故 医療に関わる場所で起きるあらゆる事故のこと。このうち、医師や看護師ら医療従事者が当然払うべき業務上の必要な注意を怠ったために患者に傷害を与えたものを医療過誤という。



## 編集後記

今回のニュースレターは、趣をことにした形式で作成しました。本号は、9月17日の世界患者安全の日（WPSD：World Patient Safety Day）のイベントとして広報委員会で小さな座談会を企画しました。新聞記者である道丸委員の司会で、新田委員、道丸委員から医療安全に対する思いや今年のテーマである“Engaging patients for patient safety”についてお話しを伺いました。その中では、「対話」「きょうどう」が重要なキーワードとしてあげられました。

COVID-19のパンデミックにて人と人とのコミュニケーションが大きく分断され希薄になりました。家族との対話、職場での対話、そして患者さんとの対話、本当に大切です。私は、相手を思いやるほんの小さな「声かけ」から、人との対話を深めてみたいと感じました。(M.N.)

広報委員会（2023年12月現在）

秋山 美紀

石井 宣大

荒神 裕之

堀田 まゆみ

永尾 るみ子

新田 雅彦

水本 一弘

道丸 摩耶

渡邊 清高（五十音順）